

(12) 技術・家庭科教育研究会

会 長 田能 美紀 (東中筋中)
副会長 今津 等 (中筋中)
事務局 大西 知佐 (下田中)

1. 研究主題

「実践的な姿勢を持ち、主体的・対話的に学べる児童・生徒の育成」

2. 研究経過

| 実施年月日 | 研究のあらまし | 会場 | 備考 |
|-----------------|---|--------------------------|----------------------|
| 令和元年 5月8日(水) | 四万十市教育研究大会 組織総会 | 中村南小学校 | 参加者 10名 |
| 7月31日(水) | 技術家庭科研究会 ・技術分野 内容 D 学習指導要領の読み解き プログラミング体験 中村高校のシステム化 中村高校の ICT 活用授業 ・家庭分野 内容 C 布を用いたものの製作 | 県立中村中学校 東中筋中学校 | 参加者 4名 参加者 5名 |
| 11月13日(水) | 四万十市教育研究大会 (講話・実習) ・技術分野 内容 B 「失敗しない畑づくり」につ いての講和と実習 ・家庭分野 内容 C 高校の被服実習の授業見学 講和・作品作り (高校家庭科の実態と、中高の つながりについて) 協議 | 幡多農業高等学校 幡多農業高等学校 | 参加者 3名 参加者 6名 |

3. 今年度の取り組み

夏季研修会は、幡多地区技術・家庭科研究会と日程が合わず、昨年同様、四万十市教育研究会単独での実施となった。

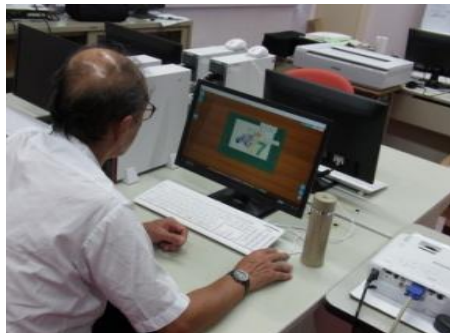
●技術分野

前半に学習指導要領の読み解きと、SKYMENUの活用～プログラミング体験～を行い、後半は中村高校の山崎隆文教諭を講師に迎え、中村高校のシステム化と中村高校のICTを活用した授業づくりについて話を伺った。

<参加者の感想>

- ・統廃合の関係もあり、予算の請求等が難しく備品としての用意が難しい。
- ・臨時免許で技術を教えている現状もある為、専門知識を持って授業を行う事ができていない所もある。
- ・現状の学校で、できる限りの道具の準備や備品の整理をしていきたい。

- ・基礎的なプログラミングの考え方を学ぶ事ができた。いくつかのプログラミングの基礎を学べるサイトもある為、学校で使えるものを検索してみる。
- ・実際に体験してフリーズする場面もあったので、生徒が使用するときも起こる可能性がある為、注意が必要になると感じた。
- ・アニメーション形式や音も使えるので、論理的思考を使いながら考えさせることができる。



●家庭分野

「布を用いたものの製作」として、教科書と布を持ち寄り、教科書に教材として載っている被服作品を実際に作成し、授業で扱う際の課題やポイントについて考えた。小学校で扱う、玉どめ・玉結び・並み縫い・返し縫い等の基本的な縫い方を活かした作品づくりについても、意見交換を行うことができた。また、作品の型紙作成や生徒への掲示物の作成も行い、すぐに授業で使える教材の研究ができた。

<参加者の感想>

- ・すぐに授業で使えるものを考える事ができたし、実習の際に生徒に提示する教材作りもできた。授業で扱う際、教師が留意すべき点も明確になった。
- ・市販のキットとして販売されているものでも、「より使いやすく」を生徒に考えさせるポイントが見えてきた。
- ・布の種類や裁縫の基礎を教えてもらえた事で幅が広がった。



4. 令和元年度四万十市教育研究大会

今年度は幡多農業高等学校を会場とし、技術と家庭科の部員がそれぞれの別の内容の研修を行った。

●技術分野

北井大也教諭に講師をして頂き、幡多農業高等学校についての説明を受けた後、作物の栽培についての実習を行った。実習では、シクラメンとGAP トマトを取り扱った。シクラメンでは、葉っぱを外側に抑えていき、花を真ん中に固定させるという葉組みの実習を行い、これによって日当たりをよくして根っこに光を当てることができたり、風通しが良くなって丈夫に育てることができたりするなどの知識を習得することができた。GAP トマトのGAPとは、Good Agricultural Practice の略称であり、適切な農業生産の実現に向けて幡多農業高校が現在力を入れている生産工程管理の取り組みである。GAP トマト収穫では、真っ赤になっているものを選び、2度摘みをして傷がつかないようにするなどのポイントを学ぶことができた。



●家庭科分野

家庭部会の前半は、高校2年生の被服製作の授業を見学し、自分たちも同じ作品を制作させていただいた。高校生がどんな作品をどんな道具や手法を用いて制作しているのを見たり、実際に制作してみたりすることにより、中学校段階で自分達が家庭科の授業で取り扱うべき学習内容について考えることができた。後半は、東加代教諭を講師に迎え、幡多農業高等学校を含めた近隣の高校で取り扱っている家庭科の学習内容や、高校生を教えている中で感じている生徒の実態や変容などについてお話を伺うことができた。高校家庭科も授業の単位数が減り、被服実習を行っている学校が無くなってきている事などを知ることができ、専門の科がある学校に行かない限り、被服の実習を行うことがほとんど無いため、中学校が最終の学ぶ場になるという生徒がほとんどになるということも確認できた。高校の生徒の実態では、針に糸を通せない、ボビンの入れ方やミシンの糸の通し方がなかなか定着しない、スマートフォンなどで調べた簡単なレシピは作れるが少し複雑な工程が入って来ると作るのが面倒くさくなってしまふ、生活体験が少ないため完成形などをイメージすることが難しい、想像力を働かせて考えることが難しい等の実態を教えていただいた。



5. 今年度の成果と課題

《成果》

- ・授業で活用できる布を用いた作品の制作や、説明の際に使用できる提示教材の制作ができた。
- ・高校生の変容や高校で教えている家庭科の具体的内容など、近隣の高校の実態を知ることができ、自分たちが中学校段階の授業で取り組むべき内容について考える事ができた。
- ・臨時免許で教えているため、知らないことがたくさんあった。今年度に高校の先生等から専門的なことを色々学べたので、来年度以降に活かしていける。

《課題》

- ・年度当初の計画では幡多地区技術・家庭科研究会と一緒に開催する予定だったのが、日程が合わず別開催になってしまったため、参加しにくい部分があったかもしれない。
- ・アプリを取る事ができなかつた等、各校の設備面や予算の問題で、研修で習った内容を学校ではなかなか活かしきれない部分もあった。
- ・数年後の中学校の統合に向け、授業で取り扱う内容について、四万十市内の学校でそろえられるところをそろえていくという、ベース作りをしていく必要がある。
- ・生活体験が少なくなっている生徒に対して、技能を定着させるための取り組みを考えなくてはならない。